# 小さな母の里

境　忠一

# さな母の里

境　忠一

境忠一（さかいただいち）
一九三〇（昭和五）年、福岡県出身。大牟田市第三国民学校、三池中学を経て、九州大学文学部卒業。現在立正大学文学部教授。主な著書に『評伝宮澤賢治』『詩と故郷』『詩と土着』『近代詩と反近代』詩集『ものたちの言葉』『迷った羊のあふれる夜に』など。詩集『内なる有明海』は本書の姉妹作品。
現住所　東京都品川区南大井六―十二―四浅野荘二〇一　電話（〇三）七六六―九一七七

小さな母の里／境　忠一
一九七八年三月一日初版
定　価　一二〇〇円
著　者　境　忠一
発行者　藤原敏文
発行所　株式会社ロッキー
東京都豊島区東池袋1～42～12
電　話　九八九局〇二一一（代）
振　替　東京四―五八三一二
印刷所　梅丸印刷所・エスコ
© 1978 Tadaichi Sakai
〈検印廃止〉
落丁・乱丁本は小社にてお取り替えします。
PRINTED IN JAPAN　0093-310301-9236

小さな母の里　目次

第一章　小さな有明海……五
第二章　小さな母の町……六九
第三章　消えた広っぱ……一五五
第四章　小さな妣の里……二〇九
あとがき

祖母と母に捧げる

装画・挿画／働　正

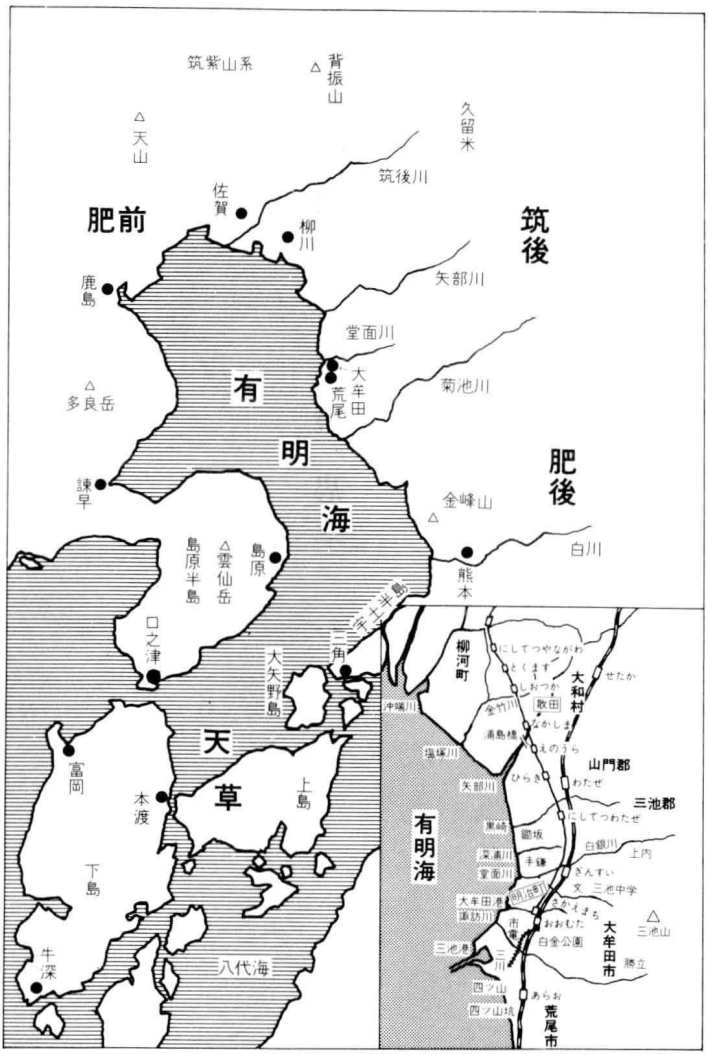
題字レタリング／岩田美代子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

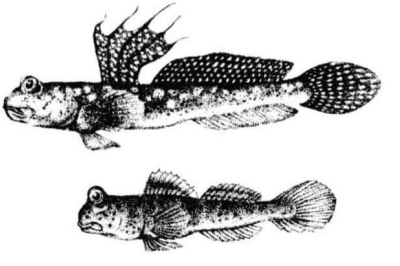
# 小さな母の里

境　忠一

有明海・昭和十年代大牟田市附近



# 第一章　小さな有明海



## (一)

おじちゃんは押網をかついで、よく海へいった。おじちゃんは背の高い大男で、こわかった。長い二本の竿に、シブに浸けた網をぐるぐる巻きつけて、目籠とはんぎりをぶら下げて帰ってくる。はんぎりには灰色の長靴が脱ぎ棄ててある。

「ただいち！　とれたぞお」

獲物があるときは、おじちゃんの声は大きい。おじちゃんは、まず、孫に獲物を見せたいのだ。だから、獲物がないときは黙って帰ってくる。

「ただいち、帰ったぞお」とは言わない。だから、いつ帰ったのかわからないことだってある。目籠にはジャジャガネやヘイケガネやヤドカリなど、食べられないものまではいっている。孫がよろこぶからだ。クッゾコ、ハゼクチ、ハダラ、コチ、イサキなど、時にはボラやアカメがとれていることもある。その多くは、まだピチピチ生きている。黄色い殻にぼかしの斑点がついているジャジャガネや、兜をかぶったようにこわい恰好をしているがほんとうはおとなしいヘイケガネは、ぼくの生きた玩具なのだ。どれもおじちゃんが有明海から取ってきたものだ。

台所の前の土間におじちゃんが目籠をおろすと、家中の者が集まってきて、獲物をのぞきこ

む。

「ほら、ただいち、こんやはコチの味噌汁ぞ」とおじちゃんが言う。ぼくはコチの味噌汁などあまり好きではない。

おじちゃんは手も足も大きく、顔も大きい。ジャジャガネは小さい。ジャジャガネの足は水かきのように平べったくなっていて、地上ではうまく動けないので、じゃらじゃらと音をたてる。海のにおいがあたり一面にたちこめている。

押網はおじちゃんの道楽なのだ。時には、「くっぞこかき」といって、先の方にいっぱい鉄の刺のある網を持っていくこともある。

海は一体どこにあるのか？　毎日のようにガネやサカナを取ってきても、まだサカナの泳いでいる広い所はどこにあるのか。そこには、一体何が棲んでいるのか……。まだ、幼稚園へいくずっと前のことだ。

海はぼくにとって、何よりもまず祖父の中にあった。目籠から逃げ出そうとするジャジャガネのいるところだった。遠いようですぐ近くにあるようで、怖いところのようで、すばらしいところのようであった。おじちゃんはよく言っていた。

「有明海はおりが庭たい。クッゾコは海にあずけとっとたい。いるなら、どしこでんとってくるぞ。ボラでん、アカメでん、どんどんおりが網にはいってくっとぞ」

おじちゃんの話を聞いていると、海にはさかながうようよ泳いでいるように思われた。その割には、獲物は少なかったようだが、おじちゃんは「いっぺんにとってくるとさかなの減るけん、

少しずつとってくると」と言っていた。家を建てることと漁に行くことがおじちゃんの道楽だった。おじちゃんは肺病になって、木室村へ行って、ぼくが小学校一年生のときに亡くなった。

## (二)

はじめて海を見たのはいつだったのだろうか……。よくわからない。はじめてに近いものに三つばかりの記憶がある。どれが一番古いのか、わからない。

まず、母の実家のおばあちゃんがやってきて「散歩するのでついて来んね」と言った。おばあちゃんは、明治町一丁目の通りをまっすぐ、海の方へ歩いていった。いまから考えれば、電化工場の方へ行ったように思われる。町なかから離れて遊びに行ったことがあまりないので、帰れるだろうかと心配した。散田のおばあちゃんが、なぜそんなところまで行ったのかわからない。多分時間をもてあましたのだろう。距離にすればせいぜい往復二キロくらいなので、大人になってみれば、たいした距離ではない。ぼくは怖くなったので、おばあちゃんの手をしっかりにぎっていた。道が鉱石の粉でうす赤く染まっていた。

「おや、潮のにおいがするね」

とおばあちゃんが言った。

「海があるかもしれない。行ってみよか」

工場の建物がみえる手前のところで、左手に曲ると、船が見えた。石のようなものを積み込



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んでいた。潮が満ちていたらしく、舷を波がピタピタと叩いていた。潮のにおいを嗅ぎ、ピチャピチャという小さい波の音を聞いていると、遠くまで来たような気がして心細くなった。

「おばあちゃん、帰り道は知っとるね」

と聞いた。

「さあ、知らんばよ。どうすっじゃろか」

おばあちゃんはぼくをからかったのだ。船は大きくて、黒く塗ってあり、下の方は赤く塗ってあった。いまにもボォッと音を立てるように見えた。ふしぎなことに誰も乗っていなかった。向う岸にも、小さい船が何隻も浮かんでいた。ここは海というよりも、小さな港のようであった。

「もう帰ろうかね。ただいちが淋しがって、泣き出しそうじゃけんね」

とおばあちゃんは言った。その日は、曇っていたように思える。おばあちゃんが、遠いところへだまして連れていく人さらいのように思えてきた。

しかし、あのように深い詩をかかえた――――というよりも、詩そのものである港をみたことがない。大人になって見た大牟田港は、平凡で汚れた川口の小さな港にすぎない。しかし、薄暗い曇天の下で見た幼い時の港は、潮のにおいと見知らぬ所へやってきた不安に色どられて、存在の裂目に揺れていた。おばあちゃんは、その存在の裂目へ、ある日、ぼくを連れていったのだ。だから、その日の港だけが、ぼくの中に凝り固まって、いつまでも消えようとしない。あの時の潮のにおいと、ピタピタというにぎやかなようでさびしい波の音はまだ消えない。そこへ行け

ば、いまでもそのままの景色があるような気がする。

散田のおばあちゃんは、この日、よそゆきの着物を着ていた。このおばあちゃんがいつ亡くなったのか、記憶にない。ただ、母はこの散田のおっかさんが亡くなると、年中帰っていた実家へ、あまり帰らなくなってしまった。母親がいないと、他人の家のような気がすると言っていた。

## (三)

もうひとつの海の記憶……。これも、やっぱり大牟田港だ。当時はいうまでもなく、それが大牟田港とは知らなかった。あとで何度か訪ねているうちに、当時の記憶が甦ってきて、そこ以外にないことがわかった。道が切れて海の中へ斜めにはいりこんでいる独特の地形は、このあたりには、ここ以外にない。

この日、ぼくは父と須鼻の高徳さんと三人で、祖父の持船の大高丸を見にいったのだ。父は自転車の前の方に、座布団を結びつけて、それにぼくを乗っけて、連れていってくれた。

大高丸は祖父が天草で鉱山をやっていて、天草でとれた鉱石を運ぶために買った船だ。もっとも、鉱山は失敗して、鉱石はあまり出なかったので、薪炭や雑貨を運搬していたらしい。なんのために、この日、大高丸を見にいったのかわからない。その理由を聞こうとしても、父も高徳さんも、もうこの世にはいない。しかし、ぼくが大高丸を見たのは、これがはじめてで、おわりだった。おそらく祖父が病気で倒れたあと、売られたのだろう。

大高丸は岸に着いていなくて、岸から少し離れたところに浮いていた。岸には伝馬船が二、三隻つないであった。自転車から降りて、近くの店でお菓子を買ってもらって、父と一緒に伝馬船に乗った。高徳さんは長靴をはいていたので、水の中にはいって、伝馬船を押し、掛声をかけて、舷から伝馬船に乗りこんできた。伝馬船が大きく傾いたので怖くなった。高徳さんは大高丸まで櫓を漕いだ。もっとも岸から大高丸までは、少ししか離れていない。

大高丸の船倉はからっぽで、何も乗せていなかった。薄暗くがらんとして、寒々としていた。なぜ何にもないのかふしぎに思われたので、

「なしけん、なんも乗せとらんとね」と聞いてみた。父は、

「荷物はきのうまでに、みんな降ろしたと」

というようなことを答えたようだ。しかし、運転室に入ると、畳が敷いてあって、薬罐や湯呑が置いてあった。記憶違いでなければ、船頭さんがそこにいたように思われる。地上の家と同じように、住み心地がよさそうであった。

祖父の後妻にあたるおばちゃんは、この大高丸のことをよく話した。おばちゃんというのは、「ば」にアクセントがあって、叔母の意味ではなく、おばあちゃんの意味なのだ。おばあちゃんもおじいちゃんも、そんなに歳をとっていなかった。それで、おじいちゃんがおじちゃんになっているのだ。誰が言いだしたのかわからないが、家ではそう言っていた。おばちゃんはおじさん（じにアクセント）といっていた。

おばちゃんは大高丸で長崎や天草の高浜へおじちゃんと一緒にいった話をよくしていた。お

じちゃんは少々海が荒れても船を出すので、何度も海難救助の白旗を挙げなければならなかった。高浜では海の荒れている日にはいってくる船があると、大高丸だということになっていた。

「こげん天気が悪かときにゃ、大高丸じゃなしな、はいってこんばい」

というときのおばちゃんは、おじちゃんへの信頼にあふれているようにみえた。大高丸は後妻であったおばちゃんにとって、家から解き放され、祖父とふたりだけになれる唯一の機会だったのだろう。

たった一度しか見たことのない大高丸は、祖母の話の中で、有明海や不知火海の荒天をものともせず渡っていく幻の船になっていた。長崎という地名も、天草という地名も、ぼくにとっては、大高丸が運んでくれるはずのものであった。大高丸に乗れば寄り道をすることなく、真直ぐに長崎に行けるのだ……。

大高丸はいなくなったが、大高丸の祝旗はいつまでも表口のカーテンになって残っていた。間口二間ある表口を両側から覆うほどの大きさで、青地に熨斗を白く染めぬき、草書で赤く大高丸と大書してあった。大高丸は小さい荷船にすぎなかったようだが、祝旗は大きく華やかで、静かに垂れ下がっているときでも、潮風にはためいているように思われた。夕方になると、腰板の上は一枚ガラスの表の戸を四枚閉めきって、祝旗のカーテンをひくと、それまで隠れていた大高丸という文字があらわれる。大高丸は四枚のガラスの中を、黒い影絵になって動いていた。

大高丸には祖父と祖母がふたりだけ住んでいて、ランプをともしている。そのランプの中に、

もう一つの小さい有明海がかくれていて、大高丸は逆様になって、小さな有明海を動き廻っていた。

## (四)

三番目の海の記憶――これも、やはり港だが、こんどは三池築港の方だ。もしかしたら、この記憶が一番古いものかもしれない。散田のおばあちゃんと見た海は、何となくはじめてではなかったような気がする。潮のにおいがするね、とおばあちゃんが言った時、それがどこから来るのか、漠然とだがわかっていたような気がする。

こんども父の自転車に乗せられて見に行ったのだが、うしろの荷台に籠を結いつけて、その中にはいっていった。籠の中にはいった記憶は、この時のほかにはない。いつも自転車の前に座布団を四つに折って、紐でくくりつけて、それに乗っていった。籠にはいるとすれば、かなり小さい時になるのだろう。明治町から築港までは大分遠いので、籠でなければ安全でないと、父は考えたのだろうか。しかし、ぼくにしてみれば、いつも父が後にいて、すぐ横にハンドルを握っている太い手があるので安心していられたのに、籠にはいって父の背中しか見えないのは、怖ろしくもあれば心細くもあった。しかし、それを口に出して言うほどのことではない。

この日は築港に停泊している巡洋艦を見に行ったのだ。この巡洋艦も築港の中に浮かんでいて、岸から小さい船に乗って行かねばならなかった。参観者が多いので、行列をつくって順番を待

っていた。海の水の色は黄緑色をしていて、風があったので白波が立っていた。小さい船だし、人が多いので、父の手をしっかり握っていた。

巡洋艦が何という名であったのか、どんな武器を持っていたのか、記憶にない。わずかに記憶に残っているのは、艦内の廊下を歩いていると、白く塗った大きなパイプが何本も低い天井を這っているのが、気味悪かったことと、艦内に何ともいえない妙なにおいがただよっていたことだけだ。それは潮のにおいではなかった。重油のにおいだったのだろうか？　それともペンキのにおいでもあったのだろうか？　頭の痛くなるような、これまで知らなかったにおいだった。船の中は参観者でいっぱいになっていたような感じがする。しかし、誰がいたのか、水兵の面影も記憶にはない。

それよりも、強く印象に残っているのは帰り道のことだ。多分近道をするためだろうが、父は小さな路地のようなところにはいりこんで、曲ろうとするとき、何かにぶつかり、バランスを失って倒れた。自転車がゆっくり横に傾いたので、ぼくは籠の縁にしがみついた。しかし自転車が倒れたので、籠からはみ出して、肘をすりむいてしまった。血が出たのを覚えている。多分、声をあげて泣いたのだろう。その痛さは忘れてしまったが、自転車が倒れるときの感じがありありと残っている。籠にどんなにしがみついても、どうすることもできない怖ろしさがいつまでも離れない。いまでも、怖いことのように思われる。やはり父は後にいるべきで、前にいてはいけなかったのだ。籠はもうこりごりだった。巡洋艦のイメージは、倒れたときの怖ろしさに打ち消されて、小さく縮んでしまった。大高丸は祖母の話を通して拡大され、自在に



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com